
永遠に生きて

黒雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠に生きて

【Nコード】

N6190F

【作者名】

黒雲

【あらすじ】

私は龍だ。私は多くの人に少年のことを知ってもらいたい。他愛もない話だが、私にとっては何よりも大切なことなのだ。

私は龍だ。

さあ、君はこれを聞いてどう思った？

そんなものがあるわけがないと思ったかもしれない。だが、私たちは確かに存在する。たとえ君が私たちの存在を知らなくとも、それは真実なのだよ。

そして私は君へ、そして大勢の人々へ、一つの物語を読んでほしくてこの文を書いている。

おや？ 君は私が大きな手で、小さなパソコンのキーボードを叩いているとも思っているのかい？

それはとても愉快的想像だが、残念なことにそれは違う。

私は今、人間にとり憑いてこの文章を打っているのだ。

霊が乗り移っているような感覚。とても言えばわかりやすいかな？ そろそろ本題に入りたいところなのだが、その前に言いたいことがある。それは、人間とはなんて不思議なのだろうということだ。

君たちは永遠の命を持っている。記憶という名の永遠。誰か一人でも君のことを覚えていて。それだけで君は『生きる』ことができるのだろ？ 私はそれが不思議でならない。そして、それが羨ましくてしかたがないのだ。

ああ、わかつている。私なんぞのつまらない話はもういいと言いたいのだろ？

では、話し始めよう。そう、あれはまだ私が若く、人間のことでよく知らなかったころの話。私は、一人の少年と出会った。

私たち龍の姿は人間には見えない。いわゆる『空気』や『霊』と

同じようなものなのだ。そこには確かにあるが、目には見えない存在。それが私たちのだ。

ある日、私は興味本意で一人の人間にとり憑いた。私がとり憑いた人間はまだ幼い少年だった。幼いとは言っても、私の感覚であつて、君達にはどういう風に感じているのかはわからない。

少年は真っ白な部屋、真っ白なシーツに包ま^{くる}っていた。まだ人間のことをよく知らなかった私はその部屋のことがわからなかった。今思えば、あの部屋は病院の個室だったのだろ^うな。

少年は眠っていた。意識は深く、深く沈んでいて、少年の中に入った私にさえ少年の意思がどこにあるのかわからなかった。

「起きたの……？」

私が起きると、近くにいた一人の女性が私に、いや、私がとり憑いた少年に近づいてきた。後に知ることになるのだが、彼女は『母親』と呼ばれる種類の人間だった。

彼女は少年の体に抱きついて涙を流していた。

「……………」

私は何と言つていいのかわからなかった。ただ、母親が泣いていると言ふことと、周りの白い服に身を包んだ者達が信じられないものを見るような目で私を見ていることだけはわかった。

私はしばらくわけのわからない装置に入れられたり、体を調べられたりした。

正直、気味が悪かったが、人間の世界では当然のように行われていることらしい。

そんな気味の悪い行為は日が沈むまで続けられ、空が暗くなり始めたころ、私はようやく少年の家へと連れて行かれた。

この少年はずっと昏睡状態なるものになっていて家に帰れなかったらしいのだが、今は怪我も病もなく、彼の体は元気そのものだった。

「さ、今日はあなたの大好きなものを作るからね」

私が気味の悪いことをされている間、男の方……『父親』とでもいう者だったような気がする。とにかくその者に私を任せ、何処かへ行っていた母親は笑顔で料理をしていた。

『少年よ、君は一体何が好きだった？』

答えが返ってくるなどとは思っていなかった。私は少年と私の好みが合っていればいいと思っただけだった。

『ボクはね、フルーツサラダが好きだよ』

深いところで眠っていたはずの少年が答えた。

少年の意識は眠たそうだったが、その声は確かに笑っていた。

『奇遇だな。私も野菜や果物は好きだ』

『そう。よかった』

少年は私について何も聞かなかった。私も少年のことは聞かなかった。

時間はまだまだあると思っていたのだ。これからいくらでも知れればいい。何故少年の意識がこちら側に返ってきたのか、何故少年は今まで帰ってこなかったのか。全ては時が教えてくれると信じていた。

少年と私は共に生きた。

表に出ているのは常に私だったが、少年はいつも私に様々なことを教えてくれた。

たくさん遊びを、たくさん食べ物のことを、たくさん建物のことを、たくさん道具についても教えてくれた。

少年は学校が好きだと言った。勉強が好きなのだと。私は規則に縛られる学校は嫌いだったが、少年が望むので毎日学校へ行った。

だが、そうこうしているうちに私も学校が好きになっていった。様々なことを教えてくれ、様々な者達と共に過ごす。それが不思議と楽しかった。

私が学校の者達と遊ぶと少年も喜んだ。こんなに楽しいことはな

いと言った。ぶつかって、怪我をして、血を流しても少年は楽しいと笑っていた。

私はずっと、ずっとこのままでもいいとさえ思った。理由などはない。いや、理由はある。楽しいからだ。少年と生きるのが、人間と生きるのが。

『ねえ。君は、ボクがいなくなってもボクのことを覚えていてくれる？』

ある日少年が尋ねてきた。

『……？何を言っている。当然だろう』

私の寿命は人間とは比べ物にならないくらい長い。だが、こんなに楽しく、充実した年月を忘れることはない。

『よかった……』

『どうしたというのだ？』

私は嫌な予感がしたが全て気のせいだと信じた。

『ボクね、もう死ぬんだ』

嘘だと反論したかった。したかったが、私にはできなかった。少年と体を共有している私がそのことに気づかないはずがなかった。

少年の体はもう長くない。

知っていた。知っていたが気づかないふりをしていた。

『いいんだ。知ってたから。ボクはずっと体が弱かった。友達と遊ぶことも学校へ行くこともままならなくらい。』

だからボクはずっと眠っていた。でも、君がきてくれたから、ボクはたくさん楽しいことができた。もう、お別れなのが、寂しいけど……。幸せだった。

ボクのこと、忘れないで。君が覚えていてくれるかぎりボクは死なないから』

少年は私に何も言わせなかった。彼は自分の言いたいことを言う息絶えてしまった。

体が死に、私は強制的に体を追い出された。

私は少年に聞きたいと思っていた。本当に幸せだったのか。私が覚えていれば少年は本当にずっと生きていられるのか？

今ならわかる気がする。少年は確かに私の中で生きている。だが私は近々死ぬ予定だ。

私は死ぬのは怖くない。ただ、少年が死んでしまうのが怖い。

だから私は少年のことをこの物語を読んでくれている君達に伝えたい。そうすれば君達の中で少年は生き続ける。

少年は優しくかった。少年は不思議だった。少年は強かった。少年は、少年は、私にとって、ただ一人、人間の友達だ。

ああ、少年の名を伝えねばならないな。少年の名前は、だ。

私の名前？ 私の名前なんぞ聞いてもしかたがないさ。私は長く生きた。もうこれ以上生きたいとは思わない。

少年も私と同じように思っているのだろうか？ だが少年よ、残念だったな。私は君に生きて欲しい。例え

これが私のエゴだったとしても。

（後書き）

部活で書いた小説を少し改良しました。感想などいただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6190f/>

永遠に生きて

2010年10月8日15時59分発行